

日本・韓国の高齢化と高齢者イメージ研究の変遷

細 江 容 子*・Kim ju-hyun**

(平成24年9月27日受付；平成24年11月5日受理)

要 旨

本研究の目的は、急激に進む日本と韓国の高齢化の進展の特徴をとらえ、その進展の中で、両国の高齢者イメージの研究がどのように変化してきたかを分析することで今後どのような研究が両国に必要なかの示唆を得ることである。

研究の結果、1970年に高齢化社会、1995年に高齢社会、2007年には超高齢社会となった日本では、看護領域での高齢者イメージ研究が多くなっているといえる。その理由は、高齢化率が高くなることにより、医療やサービスをうける高齢者が増加し、看護教育領域において高齢者への質の高い看護提供が課題となるためと推測できる。韓国においては、2000年に高齢化社会、2018年には高齢社会となり、2026年には超高齢社会になると予想されている。このような高齢化の流れの中で、高齢化率が日本ほどではない韓国においては、高齢者自身が持つ高齢者イメージや非高齢者世代が高齢者に対して持つ高齢者イメージの研究が多いといえる。高齢化の進む韓国においては、今後、看護・介護等の領域での高齢者イメージ研究が増えていくものと推測される。日本においては、超高齢社会の中で、高齢者がいきいきと生活できるよう自己の高齢者イメージを高めるためにどのようなことが必要かに関する高齢者自身が持つ高齢者イメージの研究が重要になると推測される。したがって、今後、日・韓の研究者が自国の研究知見を基に共同研究等を行うなどして、相互に高齢者イメージ研究の質をより高めていくことが必要であると推察される。

KEY WORDS

Aging 高齢化, Elderly 高齢者, Image of the elderly 高齢者イメージ

1 研究の背景と目的・方法

1. 1 研究の背景

日本と韓国の高齢化は、世界に例をみない速度で進行している。先進諸国における高齢化率を比較してみると（図1）、日本は1980年代まで下位であったが、90年代にはほぼ中位に、さらに2005年には20.1%と最も高い水準となり、世界のどの国もこれまで経験したことのない「超高齢社会」（全体人口中65歳以上高齢者人口比率が20%以上の社会）を迎えた。高齢化の速度を、高齢化率が7%を超えてその倍の14%に達するまでの所要年数（倍化年数）によって比較すると、フランスが115年、スウェーデンが85年、イギリスが47年、比較的短いドイツが40年であるのに対し、我が国は1970年に7%を超え、その24年後の1994年には14%に達している（2011）⁽¹⁾。一方東アジア諸国についてみると、特に韓国においては、日本を上回るスピードで高齢化が進行している。韓国統計庁の経済活動人口調査（2008）⁽²⁾によると、韓国は2000年に65歳以上人口の比率が7.2%に達し、「高齢化社会」（全人口のうち65歳以上の高齢者人口比率が7%以上14%未満の社会）に入った。さらに、2018年にはこの比率が14.3%になって、「高齢社会」（全人口のうち65歳以上の高齢者人口比率が14%以上20%未満の社会）となり、2026年にはそれが20.8%となって、「超高齢社会」に至るものと予想されている。韓国の倍化年数は日本の24年に比べ18年とさらに短く、日本に比べさらに早い速度で高齢化が進んでいくと予測されている。

高齢化の進展は、経済活動人口や雇用慣行の動向、社会保障に関連した負担など、その国の経済に大きな影響を与えることになる。欧米諸国と日本・韓国の高齢者労働力率を見ると（図2）、第2次世界大戦後、所得の向上、年金・福祉の充実により、欧米各国では、高齢者（60～64歳、あるいは65歳以上の男）の労働力率は一貫して低下している。

日本・韓国の場合も同様の傾向にはあるが、低下の程度は低く、主要先進国の中では、高齢者が最も働いている国となっている。またこの20年ほどの動向を見ると、欧米諸国に遅れて低下していると言うより、60～64歳では高いレベルで横ばい傾向にあるといえる。日本においては、65歳以上ではやや低下傾向にあるものの、韓国においては、反

*自然・生活教育学系

**Seoul National University

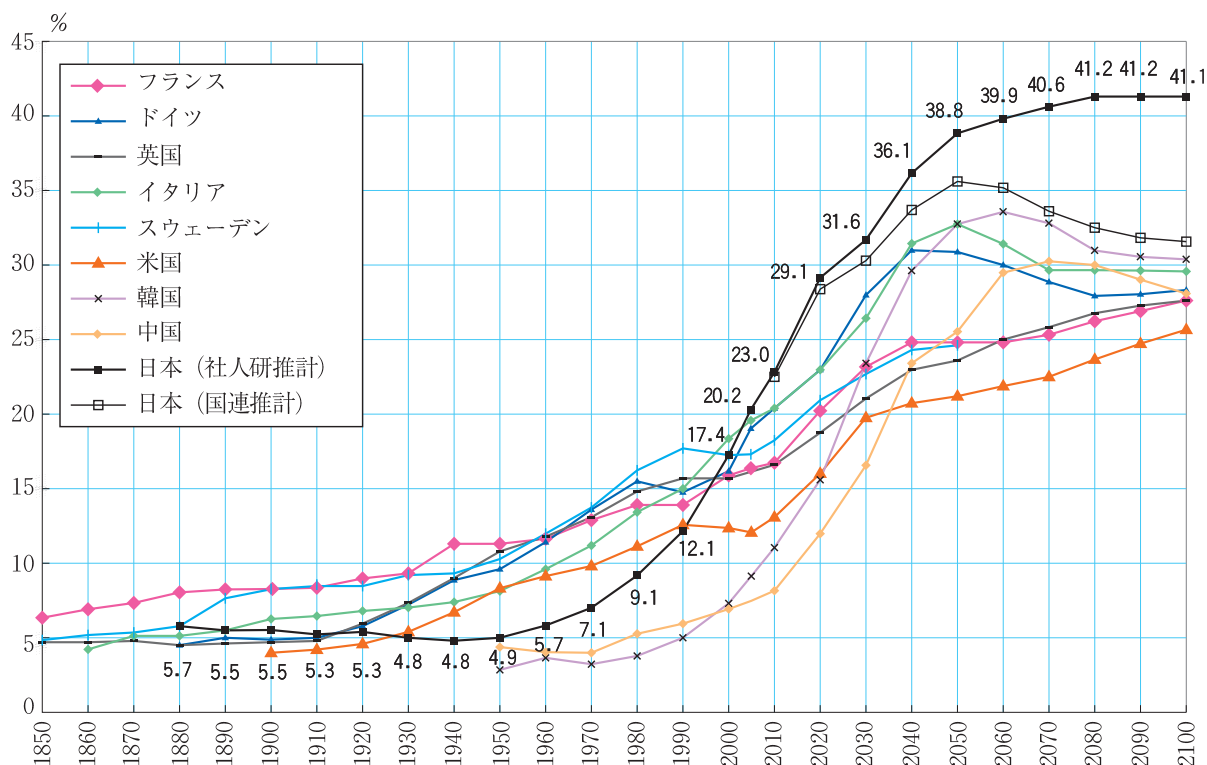


図1 主要国における人口高齢化率の長期推移・将来推計

(注) 65歳以上人口比率。1940年以前は国により年次に前後あり。ドイツは全ドイツ。日本は1950年以降国調ベース（2005年迄は実績値）。諸外国は国連資料による。日本（社人研推計）は国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（平成24年1月推計）」における2060年までは出生中位（死亡中位）推計値、それ以後は2061年以降出生率、生残率などを一定とした参考推計値。

(資料) 国勢調査，国立社会保障・人口問題研究所「人口資料集」等，国連「2010年改訂国連推計」

転上昇の傾向が認められる。日本において、60～64歳では高いレベルで横ばい傾向は、定年制延長の影響があると考えられる。韓国における高齢者労働力率の推移が欧米と異なり低下傾向にない点、また65歳以上では日本より値が高い点は、社会保障の充実度、高齢者の農業比率の高さなどが影響していると考えられている³⁾。

高齢化が急激に進展し、高齢者が最も働いている国となっている日本・韓国において、人々の高齢者イメージがどのようなものであり、それがどのような要因によって規定されるのかという研究は、超高齢化社会の中で高齢者が自立し、いきいきと生きていくために重要な要因であるといえる。

1. 2 研究の目的・方法

本研究の目的は、急激に進む日本と韓国の高齢化の進展の特徴から、高齢化の進展の中で、両国の高齢者イメージの研究がどのようなものでありどのように変化してきたかを文献研究に基づき分析することで、今後どのような研究が両国に必要なかの示唆を得ることである。

本研究のタイトルには高齢者イメージを用いているが、論文によっては老人、老人観、高齢者観といった用語の使用があり、キーワード検索には「高齢者、老人、高齢者イメージ、老人イメージ、高齢者観、老人観」を用いた。

文献研究に際しては、以下の検索サイトを利用し論文を抽出し、分析を行った。

日本

- ・ CiNii Articles・ <http://ci.nii.ac.jp/>での、学協会刊行物・大学研究紀要・国立国会図書館の雑誌記事索引データベース検索のサイト
- ・ Dial 社会老年学文献データベース Dia's Library on Social Gerontology/<http://www.dia.or.jp/dial/>
- ・ 医中誌 Web Japan Medical Abstracts Society・ <http://demo.jamas.or.jp/>

韓国

- ・ <http://kiss.kstudy.com>（研究者が主に使用する）での検索を主に利用
- ・ 학술논문정보 (学術論文情報) [last access: 2009.12.22] (<http://www.papersearch.net/>)でも検索

このサイトは、한국학술정보 (주) (韓国学術情報(株) [KSI]) が提供する学術・学位論文データベースで、韓国国内1200あまりの学会および研究所が発行する学会誌および研究刊行物に掲載されている約80万件の論文が検索可能。

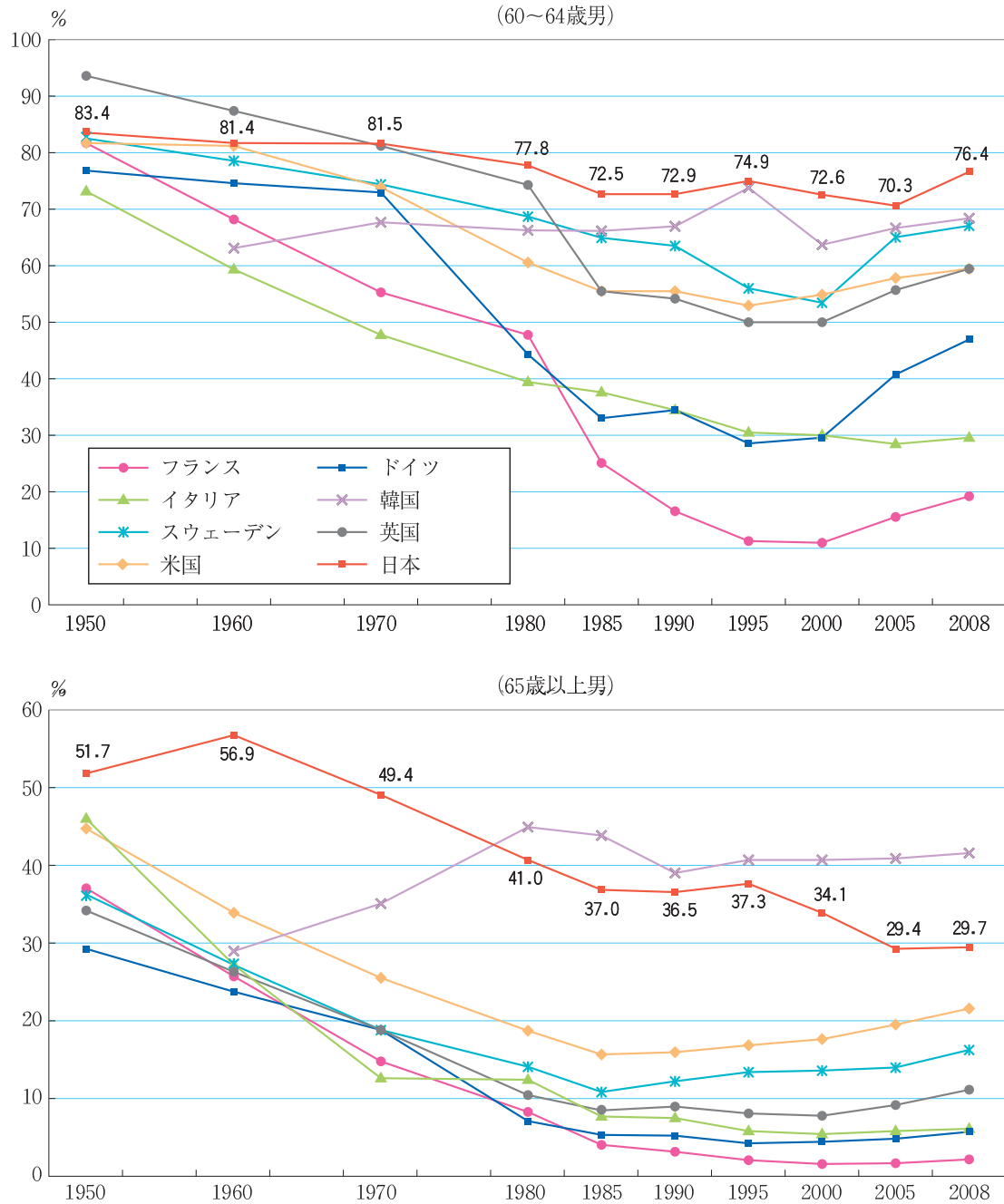


図2 高齢者労働力率の推移

(注) 1970年以前は2004年ダウンロードのLABORSTAによる。韓国1960は1966年の値。
日本は総務省統計局「労働力調査」による（但し1950年60～64歳は国勢調査も使用した推定値）。
(資料) LABORSTA (Economically Active Population Estimates and Projectons 1980-2020) 2010.7.6

2 研究の結果

2.1 日本における研究の検討

日本における学術的高齢者イメージの研究は、1984年頃に始まる。日本の高齢化率は1970年で7.1%（高齢化社会）となり、さらに上昇を続け、1994年には14%（高齢社会）に達して以降、2005年には20.1%（超高齢社会）になる中で、高齢者イメージ研究が、海外における研究の影響を受けて発展してきたといえる。日本の高齢者イメージ研

究は、その研究領域が老年学、社会福祉学、社会学、看護学、福祉学、家庭科教育学、家政学、社会心理学、体育学、スポーツ心理学、教育学などの多岐にわたっており、「高齢者」に対する関心の増加が学問の境界を越え研究を発展させてきたととらえられるが、その量においては看護学領域での研究が多いといえる。

その研究の対象は、大きくは以下の4つに区分できる。

- ①講義や演習・実習などが高齢者イメージにどのような影響を与えるかの研究
- ②非高齢者世代が高齢者に対して持つイメージ（教育対象としての児童・生徒・学生等の持つイメージ）
- ③高齢者自身や成人が持つ高齢者イメージ
- ④文学・広告などの媒体に現れる高齢者イメージ

①の講義や演習・実習などが高齢者イメージにどのような影響を与えるかの研究は、高齢化が急激に進む1984年頃にその研究が始まり、2009年には1年間で6編ほどに達し、その研究は増加傾向にあるといえる。②の非高齢者が持つ高齢者イメージ、③高齢者自身や成人が持つ高齢者イメージ、④文学・広告など媒体に現れた高齢者イメージに対する研究は、1987年代頃から全般的に分布しているが、②の非高齢者が持つ高齢者イメージの論文数が多いといえる。

2. 1. 1 講義や演習・実習などが高齢者イメージにどのような影響を与えるかの研究

この研究は、看護領域や福祉領域において多く行われており、特に将来高齢者を看護する看護大等の学生に対して、「老人看護学」や「老人施設実習」受講後の高齢者イメージの変化をとらえる研究が多くなっており、海外の研究知見の影響を受け、研究が発展したととらえられる。

海外の研究知見では、看護や介護領域においてそれらサービスの質が、その職業に携わる専門職者が持つ高齢者へのイメージによって決定されることが明らかにされている。Coe RM (1967)⁽⁴⁾やGreen CP (1981)⁽⁵⁾の研究では、「専門職従事者が肯定的な高齢者イメージをもつ場合にはサービスの質は向上し、否定的な高齢者イメージをもつ場合にはサービスの質は低下する」とされている。また、Kahana EF and Kiyak HA (1984)⁽⁶⁾やBagshaw M and Adams M (1985-1986)⁽⁷⁾の研究では、「否定的な高齢者イメージをもつ専門職従事者は、介護場面において怒りや敵意などの感情を表出し、共感性に乏しい態度をとる」とされている。日本においては、これら海外の研究知見をもとに看護や介護の質向上のため、高齢者にかかわる専門職従事者が、いかにして高齢者に対して肯定的なイメージを持ちサービスの質向上を図ることができるかを、講義や演習・実習などとの関わりから検討している研究が多いといえる。

鳴海ら(1986, 1988)⁽⁸⁾⁽⁹⁾は講義受講後、及び臨床実習終了後の看護学生の老人観の変化についての分析を行っている。その結果、学生は講義を受けることにより、「負担」の感情を持ちながらも世話をする必要性を客観的に理解するなどしていること、臨床実習終了後、その実習を通して直接老人と接し、老人の孤独感や悲哀感を感じ取り、老人に対する「悲嘆」のイメージが増加することを示している。

また、張替ら(1989)⁽¹⁰⁾は、老人に対するイメージは1学年より2学年の方がPositiveで、実習終了後の3学年にはNegativeに変化するとしている。このことは、近藤ら(1992)⁽¹¹⁾、吉尾ら(1993)⁽¹²⁾の研究でも同様の傾向が示されており、近藤らはこのことについて、実習がこれまでの観念的な見方から現実的な見方になったためと考察し、実習後学生たちは、老人を具体的な、あるいは多面的な見方ができるようになったとしている。

松岡ら(1992)⁽¹³⁾や寺島ら(1993)⁽¹⁴⁾の研究では、指導方法の解明を目的とし、実習前後でのイメージの変化の要因を検討している。松岡らは、実習終了後、老人に対してマイナスイメージを持つ要因について、老人とのコミュニケーション、老人の態度・行動を受け取った学生の価値観、直接的な接触、実習施設の特徴及び条件であることを示している。また、寺島らは、同居経験の有無による実習前後の老人観の変化の違いについて、健康な老人と同居している学生は、実習前肯定的なイメージを持っていたが、実習後「活動性」において否定的なイメージが増え、健康を害した老人と同居している学生は、実習後老人の「能力、価値」を肯定視するイメージが増えたとし、同居経験のない学生も、実習後イメージは肯定的に変化し、「老人との関わり方」についての学びが多いととらえている。

大塚らの研究(1999)⁽¹⁵⁾では、SD法と描画を用いて、看護学生の高齢者イメージを測定している。その結果、看護学生は、全体的に肯定的イメージを持っており、そのイメージは「祖父母との会話の頻度」との関連が示されたとしている。また描画法においては、7割以上の学生が「白髪・しわのある高齢者」を描いた一方、SD法で「さっそうとしている」と評価した学生は、「活動的な高齢者」を描いたことが示されている。この研究では、高齢者の看護場面での生活援助が中心となることから、高齢者の生活などに関して具体的なイメージを把握することの必要性も示唆されている。

古村ら(2003)⁽¹⁶⁾や流石らの研究(2004)⁽¹⁷⁾では、看護学生が実習による高齢者とのふれあいを通じて高齢者イメージを肯定的イメージに修正できたこと、早い学年で実習を実施することが有効であることが指摘されている。

松本らの研究(2001)⁽¹⁸⁾では、高齢者の多い病棟に勤務する看護職者は、学生時代の学習よりも卒後、高齢者に密

着したケア体験を重ねることで、高齢者の身体的な自立よりも精神的自立に着目する様になり、高齢者自身の気持ちにより添うことを優先的に考えられるようになることを示している。

高齢化が進む中、2000年頃から認知症高齢者に関するイメージ研究も行われるようになる。

本間(2001)⁽¹⁹⁾や杉原らの研究(2005)⁽²⁰⁾では、認知症についてのとらえ方や理解が、認知症についての知識量による可能性が高いことが示唆されている。

奥村らの研究(2006, 2007)⁽²¹⁾⁽²²⁾では、医療福祉系大学で学ぶ学生を対象に、認知症高齢者および健常高齢者のイメージを調査実施している。その結果、認知症高齢者と健常高齢者とでは、健常高齢者に対して有意に肯定的イメージを持つ傾向があるが、親や祖父母の態度、および祖父母とのかかわりが認知症高齢者のイメージを肯定的にしていることが示唆された。この研究では、認知症に関する知識が少ない方が肯定的なイメージを持つ傾向にあったが、高齢者に関するボランティア活動の経験がある場合には、経験がない場合に比べて肯定的イメージを持っている傾向も示された。このことから、知識だけではなく、実際にかかわることによって肯定的なイメージがうまれる可能性も示唆された。

以上の結果は、以下の様に要約できる。

- ①実習後の学生の高齢者に対するイメージは、Negativeに変化するとしているものが多い
- ②Negativeへの変化は、高齢者の見方がより具体的、多面的になったためととらえられる
- ③老人のイメージを規定している要因としては、「老人と話す機会」や「祖父母との会話の頻度」や「祖父母との関わり」であった
- ④高齢者イメージの形成には、知識も重要ではあるが、高齢者に関するボランティア活動の経験等、実際にかかわることの意義が大きい

2. 1. 2 非高齢者世代が高齢者に対して持つイメージ（教育対象としての児童・生徒等の持つイメージを中心に）

馬場ら(1993)⁽²³⁾は、中学生を対象に高齢者観スケールを用いて分析をおこなっている。この研究では、性別や年齢は高齢者イメージにはほとんど影響しなかったが、高齢者との交流が多いほど肯定的な高齢者観を持つことが示された。

遠近(1993)⁽²⁴⁾は、自分の祖父母と、祖父母以外の一般高齢者へのイメージを比較し、一般の高齢者に対するよりも自分の祖父母に対する方が、肯定的なイメージをいっていることを示している。

中野ら(1994)⁽²⁵⁾は、小・中学生を対象にSD法による高齢者イメージの分析を行い、主成分分析の結果、Evaluation（評価）とActivity（活動性）という2成分を抽出している。小学生と中学生の比較では、小学生はいずれのイメージについても肯定的に評価していたが、中学生は、「活動性」について否定的評価を示していた。イメージに影響を与える要因としては、「学年」と「高齢者との過去の経験」があげられ、低学年ほどイメージは肯定的であり、幼い時期の高齢者との交流経験が多いほどイメージが肯定的であることが示されている。

金田(2006)⁽²⁶⁾は、学童保育を利用している小学生を対象に、半構造化面接により「一日の生活時間」、「生活圏について」、「自分の祖父母について」、「大人・お年よりってどんな人」の4項目を中心とした調査を行っている。その結果、身近でよく理解できる関係にある「祖父母」は、子どもにとって「〇〇してくれる」存在であり、「嫌い」をはじめとするマイナスの感情やイメージが少ないことが示された。

この領域では、ほかにも様々な研究があるがそれらも概観し、以下のことが要約できる。

- ①青年期以前の段階で、高齢者のイメージは比較的肯定的である
- ②イメージの形成に関しては、高齢者との交流経験が関連する
- ③学年の違いによりイメージが変化する傾向がある
- ④高齢者への理解度が高齢者イメージに関連する可能性がある

2. 1. 3 高齢者自身や成人等が持つ高齢者イメージ

欧米社会では老化は否定的なものとしてとらえられる傾向が強く、Kiteらの研究(1991, 1988)⁽²⁷⁾⁽²⁸⁾では、高齢者は「無能」「虚弱」「不平を言う」「社会的技能を欠く」「過度に自己開示的」「威圧的」と認識されている。その一方で、Hummertら(1994)⁽²⁹⁾やSchmidtらの研究(1986)⁽³⁰⁾では、「親切」「支持的」「賢い」といった高齢者に好意的な見解も示されている。

Fiskeらのステレオタイプ・コンテンツ・モデル研究(2002)⁽³¹⁾においては、集団間関係を「競争（competition）」と「地位（status）」という2変数で構造化し、前者からは「温かさ（warmth）」、後者からは「力量（competence）」という次元がとらえられるとした場合、高齢者は障害者と同様に「競争性を欠く低地位集団」と位置づけられ、「温か

いが無力」という矛盾したステレオタイプが生じることが示唆されている。

Ting-Toomeyの研究(1999)⁽³²⁾では、西洋社会に比べ東洋社会は敬老の精神が強いとされているが、Cuddyらの研究(2005)⁽³³⁾やHarwoodらの研究(1996)⁽³⁴⁾では、「温かいが無力」という高齢者ステレオタイプが、香港、日本、韓国などのアジア諸国で共通に認められているとしている。

Brewer(1984)⁽³⁵⁾やHeckhausenらの研究(1989)⁽³⁶⁾からは、高齢者のイメージは、一様なものではなく、回答者の年齢層が高くなるほど高齢者表象が複雑化する傾向が示されている。また、Himestraらや(1981)⁽³⁷⁾ Hummert(1990)⁽³⁸⁾ Hummertら(1994)⁽³⁹⁾の研究では、さまざまな高齢者に関するステレオタイプの下位カテゴリーが提示されており、そうした下位カテゴリー自体が回答者の年代によって異なってくることで、各年代に共通の高齢者に好意的なステレオタイプとして、「楽隠居 (Golden Ager)」「完璧な祖父母 (Perfect Grandparent)」「ジョン・ウェイン的な保守派 (John Wayne Conservative)」の3つを、否定的なステレオタイプとして「深刻な障害者 (Severely Impaired)」「落託者 (Despondent)」「気難し屋 (Shrew/Curmudgeon)」「隠遁者 (Recluse)」の4つの下位カテゴリーを示している。

海外で多くのこのような研究があるにも関わらず日本においては、この分野での研究が少ない。

日本における古谷野らの研究(1997)⁽⁴⁰⁾では、SD法による高齢者イメージ研究の多くが児童や生徒・学生を対象としたものであり、高齢者イメージの世代差の検討に対する資料が著しく不足している点を指摘している。彼らは、保坂ら(1986)⁽⁴¹⁾、古谷野(1990)⁽⁴²⁾の研究をふまえ、45-64歳の565名の回答について高齢者へのイメージ検討を、「消極的な-積極的な」、「不活発な-活発な」、「暗い-明るい」などの一般的な形容詞対20対を用いて実施し、重複項目を除く19の形容詞対について因子分析を実施した。その結果、「力動」、「洗練」、「親和」という3因子が抽出され、その比較では、中高年者の持つ高齢者イメージは、全体として中立的であるが、全体的に中立点よりわずかに肯定的な方向が示されたとしている。古谷野らはまた、成人を対象とした検討がきわめて少ないとした上で、先行研究の結果もふまえて以下のことを指摘している。

- ①幼児には肯定的であった高齢者イメージが青年期にもっとも否定的になる
- ②その後に肯定的な方向に変化する可能性がある
- ③変化は、価値意識の加齢変化に求められうることで推察される
- ④同じSD法によるイメージ測定であっても、用いる形容詞対が異なることによって、高齢者イメージの知見が一致しないことがある
- ⑤保坂らのイメージ研究による、類似する特質をもつ因子の次元から、高齢者イメージが大学生の時期から中高年期にわたって、おおむね維持される可能性がある

2. 1. 4 文学・広告などの媒体に現れる高齢者イメージ

テレビCM等に登場する高齢者や高齢者イメージなどの分析は、これまでアメリカを中心にその研究が行われている。Zhangらの研究(2006)⁽⁴³⁾では、現実の高齢者人口構成割合に対して、高齢者がCMに起用される割合が低く、特に女性高齢者が少ないという結果が示されている。その傾向はアメリカだけでなく、イギリスのSimcockとSudburyの研究(2006)⁽⁴⁴⁾、韓国のLee, Kim, & Han(2006)⁽⁴⁵⁾、日本の山中(2000)⁽⁴⁶⁾の研究でも同様の結果が示されていることが、明らかにされている。高齢者が登場するCMの具体的な割合については、高齢者の年齢設定が研究によって異なっており、2%(Francher & Jay, 1973)⁽⁴⁷⁾から、28%(Simcock & Sudbury, 2006)⁽⁴⁴⁾とそのバラつきが大きい(Prieler et al, 2009)⁽⁴⁸⁾とされている。

日本において、テレビCM登場人物の年齢が明示されることはめったにないが、50歳以上の登場人物を「老高年」とした山中の研究では、65歳以上の「老年」の登場率は実際よりも低く、50歳から64歳までの「高年」は実人口よりも高い割合で登場することが示されている。

2. 2 韓国における研究の検討

韓国国内における高齢者イメージの研究は、1990年頃から始まる。その後、韓国の高齢化率が7.2%(2000年)となり、高齢化社会の仲間入りをして以降、2000年中頃から増加傾向を示す。韓国の高齢者イメージの研究は、その研究領域が老年学、社会福祉学、社会学、言論情報学、体育学、保健学、教育学などの多岐にわたり、高齢化の中、「高齢者」に対する関心の増加が学問の境界を越える研究を発展させてきたととらえられる。

その研究の対象は、大きくは以下の四つに区分できる。

- ①高齢者自身が持つ高齢者イメージ
- ②非高齢者世代が高齢者に対して持つイメージ

③文学・広告などの媒体に現れる高齢者イメージ

④その他（ボランティア参加や老年学教育等との関連）

①の高齢者自身が持つ高齢者イメージに対する研究は2007年頃にその研究が始まり、2009年には1年間で4編ほどに達する。②の非高齢者が持つ高齢者イメージ、③の文学・広告など媒体に現れた高齢者イメージに対する研究は、2000年代全般的に分布している。④その他のボランティア参加や老年学教育が高齢者への認識やイメージ等をどのように変化させたかに関する研究は、2000年代頃から始まる。

高齢者自身が持つ高齢者イメージ、非高齢者の高齢者に対するイメージ研究は、主にsurveyデータを使った量的手法が中心であり、文学・広告などの各媒体に現れた高齢者イメージ研究は、テキスト分析と同じ質的手法が中心であることが多いといえる。

2. 2. 1 高齢者自身が持つ高齢者イメージ研究

高齢者自身が持つ高齢者イメージ研究は、キム・ヒョクチュ（2007）⁽⁴⁹⁾の「高齢者の日常生活における運動参加と身体イメージおよび自尊感情に関する研究」、チェ・ジョンファン、ノ・キテク（2009）⁽⁵⁰⁾の「高齢者の性別の機能的体力水準が身体イメージに及ぼす影響」、ホン・ヒョンら（2009）⁽⁵¹⁾の「高齢者が認識する高齢者イメージの探索的研究」、シン・ハクジン、チョン・サンナムの「高齢者のイメージがサクセスフルエイジング（幸せな老い）に及ぼす影響」（2009a）⁽⁵²⁾および「高齢者イメージと高齢者差別経験間の因果関係に関する研究」（2009b）⁽⁵³⁾などがある。

キム・ヒョクチュ（2007）⁽⁵⁴⁾は、老人の日常生活における運動参加が身体イメージおよび自尊感情に及ぼす影響をとらえるため、日常生活における運動参加者と非参加者510人を対象に、運動参加の有無によって身体イメージに差があるかどうかを調べた。その結果、運動参加集団で身体イメージが高く、老人の日常生活における運動の有無が身体イメージに有意な影響を及ぼすことが明らかとなった。すなわち、運動参加頻度が高いほど、参加期間が長いほど、その強度が強いほど身体イメージが高まる傾向にあることが示され、高齢者の日常的運動参加の程度が身体イメージに対し統計的に有意な影響を及ぼすことが明らかとなった。

また、チェ・ジョンファン、ノ・キテク（2009）⁽⁵⁵⁾の研究では、キム・ヒョクチュ（2007）⁽⁵⁶⁾と同様に高齢者の身体イメージを従属変数とし、性別と機能的体力水準がいかなる影響を及ぼすのか分析を行った。高齢者の身体イメージのすべてにおいて、体力水準が高いほど身体イメージが肯定的であることが明らかとなった。また、高齢者の身体イメージにおいて、健康と身体的スタイルとの関連では、女性は男性よりより満足度が高いことが明らかとなった。さらに、体重関連要因では差はなかったが、機能的体力要因である筋力、心肺持久力、肥満指数では、ほとんどすべての身体イメージ要因と密接な関係を示し、敏捷性・公平性も身体イメージの体重関連要因と健康関連要因との関連性が深いことが示された。すなわち高齢者の性別と体力水準が身体イメージの満足度に重要な影響を与えていることが示唆された。

シン・ハクジン、チョン・サンナム（2009b）⁽⁵⁷⁾は、高齢者イメージとその容貌に関する差別的経験との因果関係を研究した。高齢者イメージに対する自身と他者との認識の差が高齢者差別の経験に影響を与えること、容貌維持行動は、高齢者のイメージに対する自他認識に肯定的な影響を及ぼすことが明らかとなった。また、高齢者の容貌維持行動は、老人の外的イメージに肯定的な影響を及ぼすことが明らかとなり、高齢者の外的イメージが自身と他人の認識に肯定的な影響を及ぼすこと、容貌維持行動は、高齢者差別の経験を減少させる効果があることが明らかになった。

チョン・サンナム、シン・ハクジン（2009a）⁽⁵⁸⁾はこれらの研究をさらに発展させ、高齢者に対する差別が高齢者イメージを媒介とし、サクセスフル・エイジング（幸せな老い）要因に影響を及ぼすかどうかに関して検証しようとした。全州市の4つの高齢者福祉館を利用する高齢者297ケースを分析した結果、高齢者イメージを肯定的に評価する高齢者ほどそのサクセスフル・エイジング（幸せな老い）に及ぼす影響が強いことが示された。すなわち、高齢者イメージの肯定的度合いが高いほど高齢者差別を少なく感じていた。また、高齢者差別の経験が多いほどサクセスフル・エイジング（幸せな老い）の可能性が低くなっているということが確認された。さらに、高齢者イメージが差別的経験を一部媒介としてサクセスフル・エイジング（幸せな老い）に影響を及ぼすことが確認された。これらの結果から、高齢者イメージがサクセスフル・エイジング（幸せな老い）に影響を及ぼし、さらにそのイメージは高齢者差別に影響を与え、高齢者差別を深化させる可能性があることが示唆された。研究の結果、サクセスフル・エイジング（幸せな老い）への対応戦略として高齢者のイメージ管理が重要な実践的課題であると認識されるにいたっている。

上の三つ研究から高齢者の外的イメージに焦点を合わせ、ホン・ヒョン（2009）⁽⁵⁹⁾は高齢者イメージを4種類（健康イメージ、知的イメージ、情緒イメージ、経済イメージ）に分類して分析した。高齢者は4種類のイメージ中、知的イメージを「賢明」で肯定的に、残りの「老衰」、「悲観的」、「依存性」において否定的認識を示した。経済イメージと健康イメージの認識では性差が示され、男性高齢者は「独立的」で「豊饒的」と答えた。また、年齢が高いほど

知的イメージを除いた3つのイメージ認識で否定的回答の比率が次第に増加する傾向にあった。さらに、学歴が高いほど、知的イメージを‘賢明’に、経済イメージは‘独立的’に、健康イメージは‘矍鑠的’と答える傾向にあった。有配偶者老人の回答では、さらに肯定的な傾向を示し、経済イメージでは、経済状態満足程度と関係なく‘独立的’に、さらに、自身の健康を普通だと評価している老人たちまでも健康イメージは‘矍鑠的’としていると認識していた。イメージ認識を規定する共通要因は‘経済状態満足’であり、自己報告健康度、婚姻状況、年齢がそれに続いた。

これらの研究結果から、以下のことが要約できる。

- ①高齢者の日常的運動参加の程度が高齢者の身体イメージに対し有意な影響を及ぼす
- ②高齢者の性別と体力水準が高齢者身体イメージ満足度に重要な影響を与えている
- ③高齢者の外的イメージが自身と他人の認識に肯定的な影響を及ぼし、容貌維持行動は、高齢者差別の経験を減少させる効果がある
- ④高齢者イメージがサクセスフル・エイジング（幸せな老い）に影響を及ぼし、さらにそのイメージは高齢者差別に影響を与え、高齢者差別を深化させる可能性があり、サクセスフル・エイジングへの対応戦略として高齢者のイメージ管理が重要な実践的課題である
- ⑤高齢者のイメージ認識を規定する要因は‘経済状態満足’であり、自己報告健康度、婚姻状況、年齢も関連していた

2. 2. 2 非高齢者世代の高齢者に対するイメージ研究

非高齢者世代の高齢者に対するイメージ研究は、高齢者当事者が持つ高齢者に対するイメージ研究よりもさらに多くの研究がなされている。1999年韓国老年学においての大学生の高齢者に対するイメージ研究(ソ・ビョンスク・キム・スヨン, 1999)⁽⁶⁰⁾をはじめとして2012年現在まで、約9編の研究が報告されている。

ソ・ビョンスク、キム・スヒョン(1999)⁽⁶¹⁾とイ・インス(2000)⁽⁶²⁾は大学生が持つ高齢者に対するイメージあるいは認識に関する研究を行っている。ソ・ビョンスク、キム・スヒョン(1999)⁽⁶³⁾はソウルに居住する男女大学生を対象に、高齢者に対するイメージを測定した。その結果、大学生は、一般的に高齢者に対し否定的イメージを有しており、性別による有意な差は示されなかった。また、高齢者との同居経験が、協力性の要因で有意な差を示し、対話の程度、高齢者問題への関心度、高齢者に対する授業を受けた程度が高齢者に対するイメージと肯定的な相関関係を持つことを明らかにしている。イ・インス(2000)⁽⁶⁴⁾は、農村地域の大学生を対象に高齢者に対する認識度を研究している。ソウルとは異なり地方の大学生は、全般的に老人に対して肯定的な認識を持っていることが明らかとなった。両親が自由業に従事する学生はそうでない学生に比べ、多少高い肯定的認識傾向を示しており、女子学生よりは男子学生が、宗教がある学生よりない学生が、高齢者と同居した学生より同居しなかった学生の方が、より高い肯定的認識傾向を示していた。

キム・ヨンスク(2002)⁽⁶⁵⁾は、中・高校生の高齢者イメージに対する都市と農村での比較研究を実施した。その結果、全体的に高齢者に対して肯定的なイメージを持っていることが明らかになり、中学生の場合、高校生よりさらに肯定的であり、男子生徒が女子生徒より肯定的であること、学年が上がるほど肯定的イメージが減少することが明らかになった。中・高校生の高齢者認識度に最も影響を与えた要因では、祖父母の経済水準、生徒の性別であった。高齢者の認識度は都市・農村間に有意な差はないが、高齢期が始まるとする年齢に対しては、都市・農村間に明確な差があることが明らかとなった。

アン・オクヒ他(2002)⁽⁶⁶⁾イ・ユンギョン(2007)⁽⁶⁷⁾は、年齢全般にわたっている非高齢者層が持つ高齢者に対するイメージの研究を行っている。アン・オクヒ他(2002)⁽⁶⁸⁾の研究は、大邱(テグ)および光州(クァンジュ)広域市の男女中学生、大学生計1166人を対象に高齢者イメージを測定した。その結果、高齢者に対する全般的イメージは5点満点の平均3.62点で肯定的であることが明らかになり、高齢者に対する全般的なイメージは性別、年齢、祖父母との同居経験において有意な差があることが示された。すなわち女子より男子が、大学生より中学生が、祖父母との同居経験がない集団より同居経験がある集団が、高齢者に対して肯定的イメージを持つことが明らかになった。イ・ユンギョン(2007)⁽⁶⁹⁾は“2004年度全国老人生活実態および福祉欲求調査”の調査資料を用いて、20代以上65才未満、7,767人の非高齢者層が持つ高齢者イメージに影響を及ぼす要因を分析した。高齢者の健康、情緒、知的能力と経済力に対するイメージを否定的なイメージと肯定的イメージに分け、ロジスティック回帰分析を実施した結果、非高齢者層は、高齢者の健康と情緒、知的能力と経済力に対して肯定的イメージよりは否定的イメージを持っており、特に青年層は4種類領域中、高齢者の健康に対して否定的イメージを強く持っている反面、中・壮年層は経済力に対して否定的イメージを強く持っていることが明らかになった。高齢者イメージ領域別決定要因を分析した結果、回答者の年齢、高齢者との同居の有無、老後に対する価値観、居住地域が、高齢者イメージに有意な影響を及ぼすこと

が明らかになった。高齢者と同居する人、都市地域に居住する人が高齢者に対して否定的イメージを持っていた。また、子供との関係では、情緒的親密性を重要視する価値観を持つ人が高齢者に対して肯定的イメージを持っていることが明らかになった。

イ・ヨンスク、パク・ギョンナは(2003)⁽⁷⁰⁾もShumidtとBoland(1986)⁽⁷¹⁾が用いた方法により、大学生を対象に男女高齢者に対する固定観念をとらえる研究を実施した。その結果、大学生は高齢者集団全体に対し肯定的固定観念より否定的固定観念を多く持っていた。これは高齢者の性に関係なく高齢者という年齢に基づいていることを意味する。高齢者の性別にともなう差は最初に、男性高齢者の否定的固定観念が9個の範疇（生活感覚が不足した、自己中心的な、閉鎖的な、人生に疲れた、非生産的な、悲観的な、萎縮した、活気がない、権威的な）で現れ、女性高齢者の固定観念は7個の範疇（生活感覚が不足した、自己中心的な、閉鎖的な、人生に疲れた、非生産的な、悲観的な、萎縮した）で現れ、男性高齢者に対する否定的固定観念がさらに多様なことが明らかとなり、同じ特性的意味を男性高齢者と女性高齢者に対して、それぞれ違うかたちで付与する事実が示された。女性の高齢者に対して肯定的に認知したのは‘会話’特性であり、男性高齢者に対して肯定的に認知したのは‘睡眠が少ない’、‘気になることが多い’、‘静かである’、‘静かである’は女性高齢者に対しては否定的な特性として認知していた。このような結果は同じ高齢者という同一集団において、男性と女性で性に基づいた認識の差があることを意味しているといえる。

パク・ギョングン、イ・ヨンスク(2001)⁽⁷²⁾は青少年と中年が持っている高齢者の固定観念の比較研究を実施している。研究結果は、青少年と中年が高齢者集団に対する固定観念の差異があることを示した。青少年は否定的固定観念を6個のカテゴリーに、中年は7個のカテゴリーに分類することができ、中年の高齢者に対する固定観念がさらに複雑であるという点、また、高齢者に対して記述した付加的単語の選択で、中年は主に肯定的な単語を記述した反面、青少年は否定的な単語を記述し、青少年と中年では、高齢者に対し違う認識を持つ傾向にあることが研究によって示された。また、青少年と中年では同じ単語の意味をそれぞれ違うように意味付与する事実も示された。中年が肯定的に認識した‘人生に愛着が多い’という単語を青少年は否定的に認識し、青少年が肯定的に知覚した‘睡眠が少ない’と‘犠牲的な’は、中年では否定的な単語として認識していた。

以上の結果は、以下の様に要約できる。

- ①学年が上がるほど肯定的イメージが減少する
- ②高齢者のイメージ認識度に最も影響を与えた要因は、祖父母の経済水準、生徒の性別である
- ③高齢者のイメージ認識度は都市・農村間に有意な差はない場合が多い
- ④高齢期が始まるとする年齢に対しては、都市・農村間に明確な差がある
- ⑤祖父母との同居経験がある集団が高齢者に対して肯定的イメージを持つ場合が多い
- ⑥高齢者問題への関心度、高齢者との対話の程度が、高齢者イメージと肯定的な相関関係を持つ
- ⑦高齢者に関わる授業を受けた程度が高齢者イメージと肯定的な相関関係を持つ

2. 2. 3 文学・広告などの媒体に現れる高齢者イメージに関数する研究

文学・広告などの媒体に現れる高齢者イメージ研究は、テレビ広告や新聞広告および文学作品に現れた高齢者イメージがどのようなかを分析した研究である。文学・広告などの媒体に現れた高齢者イメージ研究は、1990年代後半、2000年代初期まで数編の研究があるのみであったが、2009年以後、研究が活発になっている。

キム・ミヘとウォン・ヨンヒ(1999)⁽⁷³⁾やファン・ジョン(2002)⁽⁷⁴⁾は新聞媒体の印刷広告に現れた老人イメージを分析している。キム・ミヘとウォン・ヨンヒ(1999)⁽⁷⁵⁾は、新聞媒体の老人広告を対象に時代的变化およびその特性を内容分析した。その研究によると、老人広告は、数的には多くなる傾向を示しているが、全体に占める比率はきわめて低い水準であり、特に女性高齢者の場合、男性高齢者に比べて顕著に低いことが明らかとなった。製品別に見れば、書籍およびテープ広告、医薬品広告が多く、広告の高齢者イメージは、時代の流れにより全体的イメージや、身体的、心理的、社会的イメージで、より肯定的方向へと変化を示している。一方、高齢者広告は、そのイメージ形成および高齢者に対する態度と相関関係を示しており、特に一般世代が高齢者世代に比べて高齢者広告イメージを否定的に認識していることが明らかになっている。

キム・ミヘ(2003)⁽⁷⁶⁾は、インターネット新聞に現れた高齢者イメージの分析を、チョ・ヒスク(2009)⁽⁷⁷⁾は、絵本に現れた高齢者イメージ分析をおこなっている。

キム・ソニョン(2009)⁽⁷⁸⁾、キム・ミジョン(2010)⁽⁷⁹⁾はテレビ広告の中の高齢者イメージ研究を実施している。キム・ソニョン(2009)⁽⁸⁰⁾は、韓国と日本のテレビ広告に現れた老人のイメージを比較・分析し、韓国広告20編、日本広告24編を選択、分析した。その結果、韓国の広告では、高齢者は健康に問題があり、老人を戯画化させていて、高齢者は愛されて愛を施す存在であり、家族と社会から扶養を受ける存在として描かれていた。また、高齢者に対する

イメージの変化では、女性高齢者の場合、日本の広告では、身近で専門家的な年の重ね方をする姿で、固定観念を破り性役割の柔軟化を通じて引退後の新しいライフスタイルを楽しむ姿で、自身の空間と時間をよく管理する独立的姿で、先端技術の変化に対して自立的消費主体としての姿で描かれる傾向にあった。キム・ミジョン(2010)⁽⁸¹⁾はテレビ広告の中の老人が、社会・文化的他者、情緒・身体的他者、経済的他者として描写されると指摘している。

以上の結果は、以下の様に簡単に要約できる。

- ①広告の高齢者イメージは、時代の流れにより全体的イメージや、身体的、心理的、社会的イメージで、より肯定的方向へと変化を示している
- ②一般世代は高齢者世代に比べて高齢者広告イメージを否定的に認識している
- ③高齢者は健康に問題があり、高齢者を戯画化させていて、高齢者は愛されて愛を施す存在であり、家族と社会から扶養を受ける存在として描かれていた
- ④女性高齢者の場合、韓国に比べ日本の広告では、引退後の新しいライフスタイルを楽しむ姿で、自身の空間と時間をよく管理する独立的で先端技術の変化に対して自立的消費主体としての姿で描かれる傾向にある

2. 2. 4 その他(ボランティア参加や老年学教育等との関連)

老年学教育やボランティア活動と高齢者への態度の変化に関する研究では、イ・ヨンスク、パク・ギョンナン(2002)⁽⁸²⁾の「老年学教育が大学生の老人に対する態度に及ぼす影響」や、イ・ウンジュ、ハン・チャンワン(2009)⁽⁸³⁾の「老人対象ボランティア活動が大学生らの老人および老人福祉に対する認識に及ぼす影響」がある。

パク・ギョンナン(2002)⁽⁸⁴⁾は、男女大学生62人に老人に関する知識と経験を持つように開講された講義に参加した学生へ、講義の最初の時間と最後の時間で高齢者に対する態度を調査した。その結果、大学生たちは、講義後で高齢者への態度が肯定的に変化し、高齢者に対する理解が深まり、高齢者政策など高齢者に関する現実を正確に認識するようになり、認識の深まりと新しい認識を持つ傾向のあることを明らかにしている。

イ・ウンジュ、ハン・チャンワン(2009)⁽⁸⁵⁾は、老人対象のボランティア活動プログラムが大学生の高齢者への態度・イメージ及び高齢者福祉に対する認識に影響を及ぼすことを明らかにした。実験群と統制群に分けて比較分析した結果、事前調査では実験群が統制群より高齢者福祉に対する関心度が高いことが示されたが、高齢者に対する態度、高齢者に対する恭敬心、高齢者福祉に対して知識側面では差がないことが示された。事後調査結果では、統制群は事前調査結果と有意差がなかったが、実験群は、プログラムに参加した後、高齢者に対する態度がより肯定的に変化し、恭敬心もより高くなったことが示された。

ジミンギョング、ハングォンスック(2008)⁽⁸⁶⁾の「歯科衛生士が認識した高齢者に対するイメージおよび行動に関する研究」では、歯科衛生士 370人を対象に自記式質問紙法を用いて調査を行っている。その結果、高齢者に対するイメージ項目では、‘沈着’、‘重要’、‘勤勉’の肯定的イメージと、‘虚弱’の否定的イメージが示された。また高齢者関連特性によるイメージと行動との関係では、高齢者に対する認識が肯定的な群、親しい高齢者がいる群、現在高齢者と同居している群、ボランティア活動経験がある群で、肯定的傾向が示された。また高齢者に対するイメージと行動には、強い相関があり、高齢者に対するイメージが肯定的であればあるほど行動も肯定的であることが示された。

イム・ヨンミ他(2008)⁽⁸⁷⁾の「慢性疾患高齢者を持つ家族の高齢者イメージ-自我効能感および負担感との関係-」では、中小都市 3 病院に入院中の65歳以上の慢性疾患高齢者の面倒を見る家族187人を対象に、高齢者イメージを分析した結果、調査対象者の年齢と高齢者イメージは有意な相関があり、調査対象者の性別、経済状態、健康状態によって負担感が異なることが明らかとなった。

以上の結果は、以下の様に簡単に要約できる。

- ①学生は、講義後、高齢者への態度が肯定的に変化し、高齢者に対する理解が深まり、高齢者政策など高齢者に関する現実を正確に認識するようになる
- ②学生はボランティアプログラムに参加した後、高齢者に対する態度がより肯定的に変化し、恭敬心もより高くなった
- ③高齢者に対するイメージが肯定的であればあるほど行動も肯定的である

3 まとめと今後の課題

本研究の結果、1970年に高齢化社会、1995年に高齢社会、2007年に超高齢社会となった日本においては、看護領域

での高齢者イメージ研究が多くなっているといえる。その理由は、高齢化率が高くなることにより、医療と関わる高齢者が増加し、看護教育において高齢者への質の高い看護提供が課題となるためと推察できる。韓国においては、2000年に高齢化社会、2018年には高齢社会となり、2026年には超高齢社会になると予想されている。このような高齢化の流れの中、高齢化率がまだ日本ほどではない韓国においては、高齢者自身が持つ高齢者イメージや非高齢者世代が高齢者に対して持つ高齢者イメージの研究が多いといえる。高齢化の進む韓国においては、今後、看護・介護等の領域での高齢者イメージ研究が増えていくものと推測される。日本においては、超高齢社会の中で、高齢者がいきいきと生活できるよう自己の高齢者イメージを高めるためにどのようなことが必要かに関する高齢者自身が持つ高齢者イメージの研究やサクセスフル・エイジングへの対応戦略としての高齢者のイメージ管理の研究が重要になると推測される。したがって、今後、日本・韓国の研究者が自国の研究知見を基に共同研究等を行うなどして、相互の高齢者イメージ研究の質をより高めていくことが必要であると考察される。

引用文献

- (1) 内閣府 2011：平成23年版 高齢社会白書. 2-3
- (2) 韓国統計庁 2008：経済活動人口調査 26-35
- (3) 内閣府 2011：平成23年度版高齢者の生活と意識に関する国際比較
- (4) Coe RM 1967: Professional perspective on the aged. *The Gerontologist*, 7 (2), 114-119
- (5) Green CP 1981: Fostering positive attitudes toward the elderly: A teaching strategy for attitude change. *Journal of Gerontological Nursing*, 7 (3), 169-174
- (6) Kahana EF and Kiyak HA 1984: Attitudes and behavior of staff in facilities for the aged. *Research on Aging*, 6 (3), 395-416
- (7) Bagshaw M and Adams M 1985-1986: Nursing home nurses' attitudes, empathy, and ideologic orientation. *International Journal of Aging and Human Development*, 22, 235-246
- (8) 鳴海喜代子, 野口美和子, 土屋陽子 1986：看護学生の老人観に関する研究 第2報 ー老人看護の講義受講後の変化ー. 千葉大学看護学部紀要, 8, 12-18
- (9) 鳴海喜代子, 佐藤敏子, 藤澤里子 1988：看護学生の老人観に関する研究 第3報 ー臨床実習終了後の変化ー. 千葉大学看護学部紀要, 10, 13-21
- (10) 張替直美, 大森武子, 渡辺文子ほか 1989：看護学生の老人観に関する研究-学年別イメージ・知識についてー東京女子医科大学看護短期大学研究紀要, 69-73
- (11) 近藤益子, 太田にわ, 池田敏子 1992：看護学生の老人施設実習前後における老人観及び老人のイメージの変化に関する研究. 岡山大学医療短期大学部紀要, 3, 105-113
- (12) 吉尾千世子, 片桐美智子 1993：看護学生の老人に対するイメージの変化. 順天堂医療短期大学紀要, 4, 43-49
- (13) 松岡広子, 伊藤孝治 1992：老人看護学実習後における看護学生の老人に対するイメージ ー非好意的な印象を持った要因についてー. 愛知県立看護短期大学雑誌, 24, 7-11
- (14) 寺島喜代子, 高鳥真理子, 遠矢福子 1993：老人ホーム実習における学生の老人観の変化 ー学生の老人との同居経験の有無をとおしてー. 福井県立看護短期大学研究紀要, 18, 157-166
- (15) 大塚邦子, 正野逸子, 日浦瑞枝, 白井由里子 1999：看護学生の老人のイメージに関する研究 ーSD法によるイメージ評価と描画特徴とを中心にー. 老年看護学, 4 (1), 98-104
- (16) 古村美津代, 中島洋子 2003：健康な高齢者とのふれ合いを通しての実習の学び ー実習記録の分析からー. 老年看護学, 8 (1), 78-85
- (17) 流石ゆり子, 亀山直子 2004：『健康高齢者実習』の意義 ー学生の実習終了後レポートの分析による学習内容の検討ー. 老年看護学, 9 (1), 65-75
- (18) 松本啓子, 清田玲子, 池田敏子, 赤木節子, 羽井佐米子, 高田三千代, 松井優子 2001：看護職の考える高齢者の自立に関する意識調査. 老年看護学, 6 (1), 107-113
- (19) 本間昭 2001：地域住民を対象とした老年期痴呆に関する意識調査. 老年社会科学, 23 (3), 340-351
- (20) 杉原百合子, 山田裕子, 武地一 2005：一般高齢者がもつアルツハイマー型認知症についての知識量と関連要因の検討. 日本認知症ケア学会誌, 4 (1), 9-16
- (21) 奥村由美子, 久世淳子 2006：学生の高齢者イメージ (2) ー認知症高齢者と健常高齢者のイメージに関連する要因ー. 日本心理学会第70回大会発表論文集, 1217
- (22) 奥村由美子, 久世淳子 (2007)：学生の高齢者イメージ (3) ー医療福祉系大学生への調査よりー. 日本心理学会第71回大会発表論文集, 1011
- (23) 馬場純子, 中野いく子, 冷水豊, 中谷陽明 1993：中学生の老人観 ー老人観スケールによる測定ー. 社会老年学, 38, 3-12

- (24) 遠近三和子 1993：小学生の高齢者に対するイメージ－自分の祖父母と“ふつう”のお年寄りとの比較－. 日本発達心理学会第4回大会発表論文集, 218
- (25) 中野いく子, 冷水豊, 中谷陽明, 馬場純子 1994：小学生と中学生の老人イメージ－SD法による測定と比較－. 社会老年学, 39, 11-22
- (26) 金田千賀子 2006：子どもが抱く高齢者のイメージ. 医療福祉研究, 2, 1-10
- (27) Kite, M.E., Deaux, K., & Miele, M. 1991: Stereotypes of old and young: Does age outweigh gender? *Psychology and Aging*, 6, 19-27.
- (28) Kite, M.E., & Johnson, B.T. 1988: Attitudes toward older and younger adults: A meta-analysis. *Psychology and Aging*, 3, 233-244.
- (29) Hummert, M.L., Garstka, T.A., Shaner, J.L., & Strahm, S. 1994: Stereotypes of the elderly held by young, middle-aged, and elderly adults. *Journal of Gerontology: Psychological Sciences*, 49, 240-249.
- (30) Schmidt, D.T., & Boland, S.M. 1986: The structure of impressions of older adults: Evidence for multiple stereotypes. *Psychology and Aging*, 1, 255-260.
- (31) Fiske, S.T., Cuddy, A.J.C., Glick, P.S., & Xu, J. 2002: A model of (often mixed) stereotype content: Competence and warmth respectively follow from perceived status and competition. *Journal of Personality and Social Psychology*, 82, 878-902.
- (32) Ting-Toomey, S. 1999: Communication across cultures. New York, NY: *The Guilford Press*.
- (33) Cuddy, A.J.C., Norton, M.I., & Fiske, S.T. 2005: This old stereotype: The pervasiveness and persistence of the elderly stereotype. *Journal of Social Issues*, 61, 267-285.
- (34) Harwood, J., Giles, H., Ota, H., Pierson, H., Gallois, C., Ng, S.H., Lim, T.C., Somera, L. 1996: College students' trait ratings of three age groups around the Pacific Rim. *Journal of Cross Cultural Gerontology*, 11, 307-317.
- (35) Brewer, M.B., & Lui, L. 1984: Categorization of the elderly by the elderly. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 41, 656-670.
- (36) Heckhausen, J., Dixon, R.A., & Baltes, P.B. 1989: Gains and losses in development throughout adulthood as perceived by different adult age groups. *Developmental Psychology*, 25, 109-121.
- (37) Himestra, R., Goodman, M., Middlemiss, M.A., Vosko, R., & Brewer, M.B., Dull, V., & Lui, L. 1981: Perceptions of the elderly: Stereotypes as prototypes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 41, 656-670.
- (38) Hummert, M.L. 1990: Multiple stereotypes of elderly and young adults: A comparison of structure and evaluation. *Psychology and Aging*, 5, 182-193.
- (39) Hummert, M.L., Garstka, T.A., Shaner, J.L., & Strahm, S. 1994: Stereotypes of the elderly held by young, middle-aged, and elderly adults. *Journal of Gerontology: Psychological Sciences*, 49, 240-249.
- (40) 古谷野亘, 児玉好信, 安藤孝敏, 浅川達人 1997：中高年の老人イメージ－SD法による測定－. 老年社会科学, 18 (2), 147-152
- (41) 保坂久美子, 袖井孝子 1986：大学生の老人観. 老年社会科学, 8, 103-116
- (42) 古谷野亘 1990：通年講義による老人観の変容；専門科目「老人福祉論」の場合. 桃山学院大学社会学論, 23 (2), 1-19
- (43) Zhang, Y.B., Harwood, J., Williams, A., Ylann-McEwen, V., Wadleigh, P.M., & Thimm, C. 2006: The portrayal of older adults in advertising: A cross-national review. *Journal of Language and Social Psychology*, 25, 264-282.
- (44) Simcock, P., & Sudbury, L. 2006: The invisible majority? Older models in UK television advertising. *International Journal of Advertising*, 25, 87-106.
- (45) Lee, B., Kim, B.C., & Han, S. 2006: The portrayal of older people in television advertisements: A cross-cultural content analysis of the United States and South Korea. *International Journal of Aging and Human Development*, 64, 279-297.
- (46) 山中正剛 2000：日本のテレビ広告における高齢者像. 広告科学, 40, 61-75.
- (47) Francher, J.S., & Jay, J. 1973: "It's the Pepsi Generation" Accelerated aging and the television commercials. *International Journal of Aging and Human Development*, 4, 245-255.
- (48) Prieler, M., Kohlbacher, F., Hagiwara, S., & Arima, A. 2009: How older people are represented in Japanese TV commercials: A content analysis. *Keio Communication Review*, 31, 5-21.
- (49) 김혁출 2007『노인의 생활체육 참여와 신체이미지 및 자아존중감에 관한 연구』, 『한국스포츠리서치』 18(6):256-264.
- (50) 최중환·노기택 2009『노인의 성별과 기능적 체력 수준이 신체 이미지에 미치는 영향』, 『한국발육발달학회지』 17(4):303-308.』
- (51) 홍현방 2009『노인이 인식하는 노인이미지 탐색연구』, 『노인복지연구』, 44:327-344.』
- (52) 학진·정상남 2009『노인의 이미지와 노인차별경험 간의 인과관계에 관한 연구』, 『한국생활과학회지』 18(6):1169-1179.』
- (53) 전상남·신학진 2009『“노인의 이미지가 성공적 노화에 미치는 영향”』, 『보건과 사회과학』, 26:165-187.
- (54) 前掲載(49)
- (55) 前掲載(50)
- (56) 前掲載(49)

- (57) 前掲載(52)
- (58) 前掲載(53)
- (59) 前掲載(51)
- (60) 서병숙·김수현(1999), 대학생의 노인에 대한 이미지 연구, 『한국노년학』, 19(2):97-111.
- (61) 前掲載(60)
- (62) 이인수 2000 농촌지역 대학생의 노인에 대한 인식도 연구, 『한국노년학』, 20(2):123-135.
- (63) 前掲載(60)
- (64) 前掲載(62)
- (65) 김영숙 2002: 중·고등학생의 노인 이미지에 대한 도시와 농촌의 비교 연구, 『한국노년학』, 21(3):75-89.
- (66) 안옥희 외 2002 고령화 사회에서의 노인의 이미지에 관한 조사, 『한국생활과학회지』, 11(3):347-355.
- (67) 이윤경 2007 비노인층이 갖는 노인이미지 연구, 『한국인구학』, 30(2):1-22.
- (68) 前掲載(66)
- (69) 前掲載(67)
- (70) 이영숙·박경란 2003 대학생이 인지하는 남녀노인의 고정관념 비교분석, 『노인복지연구』, 19:83-108.
- (71) Shumidt, D.F. and Bland, S.M. 1986: The Structure of impressions of older adults : Evidence for multiple stereotypes, Psychology and Aging, 1:255-260.
- (72) 박경란·이영숙 2001: 청소년과 중년이 갖고 있는 노인의 고정관념 비교연구, 『한국가정관리학회지』, 19(6):221-239
- (73) 김미혜·원영희 1999: 새로운 노인이미지 정립을 위한 노인광고: 신문매체를 중심으로, 『한국노년학』, 19(2):193-214.
- (74) 황지영 2002 인쇄광고에 표상된 노인모델의 이미지: 기호학적 접근, 『광고학연구』, 13(2):51-73.
- (75) 前掲載(73)
- (76) 김미혜 2003 인터넷 신문에 나타난 노인 이미지 분석-오마이뉴스를 중심으로, 『한국노년학』, 23(1):13-20.
- (77) 신세니·조희숙 2009: 그림책에 나타난 노인 이미지 분석, 『유아교육연구』, 29(5):287-314.
- (78) 김선영 2009: 텔레비전 광고의 한·일 노인 정체성 비교, 『한국사회학』, 43(5):133-169.
- (79) 김미정 2010: 미디어속, 노인의 타자 이미지, 『건지인문학』, 3:217-238.
- (80) 前掲載(78)
- (81) 前掲載(79)
- (82) 이영숙·박경란 2002: 노년학 교육이 대학생의 노인에 대한 태도에 미치는 영향, 『한국노년학』, 21(3):29-41.
- (83) 이은주·한창완(2009), 노인대상 자원봉사활동이 대학생들의 노인 및 노인복지에 대한 인식에 미치는 영향 『한국노년학』, 29(4):1233-1245.
- (84) 前掲載(82)
- (85) 前掲載(83)
- (86) 지민경·안권숙 2008: 치위생사들이 인지한 노인에 대한 이미지 및 행동에 관한 연구, 『한국치위생교육학회지』, 9(3):23-36.
- (87) 임영미 외 2008: “만성질환 노인 가족수발자의 노인이미지, 자아효능감 및 부담감과의 관계, 『한국보건간호학회지』, 22(2):153-164.

参考文献

- ① 有馬明恵 2012: 日本のテレビCMにおける高齢者像の変遷 —1997年と2007年の比較— 慶応義塾大学メディア・コミュニケーション研究所研究紀要, 62, 121-134
- ② 奥村由美子 2008: 高齢者のイメージに関する文献研究 —一般高齢者と認知症高齢者に対するイメージ— 第11巻, 日本福祉大学情報社会科学論集, 57-64
- ③ 桑原洋子, 水戸美津子, 飯吉令枝 1996: “老人観”に関する研究の問題 新潟県立看護短期大学紀要, 2, 47-58

The transformation of aging populations and research on the image of the elderly in Japan and Korea

Yoko HOSOE* • Kim ju-hyun**

ABSTRACT

The purpose of this research is to find out how to advance research on the “image of the elderly” by analyzing the features of aging and how this field of research has changed in Japan and South Korea during recent years.

In Japan, the research on “image of the elderly” is focused on the area of nursing. As the aging of the population progresses, the elderly people who receive medical services increase in number, and as a predictable consequence, the provision of high quality nursing to elderly people serves as a subject in nursing education.

In South Korea, since the proportion of elderly people is not so high as Japan, there is much research on the “image of the elderly”, among elderly people themselves and the younger generation.

From now on, the aging of the population is predicted to progress even in South Korea, so the research on the “image of the elderly” is more focused on nursing area like in Japan.

In Japan, in order to raise the quality of life of elderly people, research of “image of the elderly” of adults and elderly people itself will receive a lot of attention.

Therefore, joint research carried out in relevant countries, based on this study’s findings, will be necessary to raise the quality of research on “image of the elderly”.

* Natural and Living Science

**Seoul National University